

作 川口幸宏

知的障害を持つ子どもたちの教育を切り開いた人の自立への旅



## 第7回

### クラムシーの習俗と筏師



舟形に束ねられた薪材が錨の付け根に添えられ、SとNの文字が錨の均衡を保つように配置されている図柄。文字は「<sup>サン</sup>ニコラ」を表しています。ニコラ (Nicolas : ニコラウス) は独身者や幼い子ども

などの守護聖人として多くの地域の伝承話や俚謡で歌われ続けています。クラムシーの奥地モルヴァンは乳母の里であることを紹介しましたが、聖ニコラの大いなる出番の地域なんです。その他に守備は広く、旅人、巡礼、樽職人も聖ニコラに守護を頼みとしています。それよりも何よりも忘れてはならない職能、それは、船頭や漁師、荷揚げ人夫などの水にならぬ職能です。もちろん、我らが筏師の守護聖人が聖ニコラであるわけです。

つまりこの図版は、筏師にかかわる宗教的習俗的な組織シンボルです。クラムシー筏師聖ニコラ兄弟団(1738年結成)、そして後年のクラムシー筏師聖ニコラ共済組合(1862年結成)に全筏師会が参加している、その旗幟です。次の写真は現代の聖ニコラ祝祭(毎年12月6日)の様子です。筏師組合の幟が練り歩いています。

セガンはこういう光景を目にしなかったのでしょうか。少し立ち止まり、セガンを理解するために、セガンが生まれ育った地域について、そう、階層・階級文化的なとらえ方ではなく、ひよっとしたらセガンに染みついているかもしれない土着的なものを探ってみようかと、思います。



大作『ジャン・クリストフ』の作者の同一作品とは思えない、自由で闊達な『コラ・ブルニヨン』は、作者ロマン・ロランをして、「永久に眠ったものだと思っていた過去を、つまり、わたしの皮膚に染みついて離れないコラ・ブルニヨンのすべてを、呼び覚ました。わたしは彼らに代わって語るなければならなかった。」という代物です。今を生きる者がそのご先祖様の声を聞き、筆記するという物語様式を採り入れることによって、過去の中に今の自分を見るロマン・ロランの歴史の切り取り方。どうです？

ロマン・ロランが同書を第一次世界大戦前に脱稿し戦後に公刊したその序文「戦後の序文」(1918年11月)に、「コラ・ブルニヨンの孫たちが自らを英雄にも犠牲にも仕立てた血なまぐさい英雄的行為は、『やつあ、まだ生きてる (Bonhomme vit encoe)』ことを世に明らかにしたのだ」と言っているのです。つまり、ブルゴーニュ魂というものが16世紀来、脈々と息づいている、そう、大作家ロマン・ロランの胸の内に。

それと同じものを感じて、セガンは、小品「筏師(たち)」を綴ったのかもしれませんが。そしてそれは、医学博士の先生様とブルジョア出身の奥方様とがセガンに培おうとした文化とは異質なものであったのかもしれませんが。

『コラ・ブルニヨン』は、1560年頃に生まれた50歳の家具職人コラじいさんを主人公とした、クラムシーの四季折々の、つまり歳時記にあわせた生活を綴った語り文学です。コラじいさんの語りから「クラムシーの地域性」とくに「筏師」とクラムシーとの関係性について、宮本正清さんの名訳でご紹介しましょう。(旧漢字旧仮名遣いは現代のそれに直しています。)



「・・・カニヤは、ヨンヌ川の向岸をぶらぶらしたりバイヤンの橋の上に立ちん坊をしている、筏師たちと大声に怒鳴って話している。二つの町に住む鳥は違ってもその習慣は同じことで、昼間は橋の縁に御輿をすえて近所の居酒屋で嘴をぬらすのだ。ブーヴロン河の息子とペツレエムの息子との会話は、例によって例の如く悪洒落だ。ユダヤの御連中はわしらを田舎者扱いをしてブルゴーニュの蝸牛だとか、糞虫だとか言う。そこでわしらは彼らの御愛敬に答え彼らを「蛙」とか「かますの口」とか呼ぶのだ…。

わしは先ず筏乗りたちに、カニヤとロビネに手を貸してわしの車を筏に乗せそれからわしが選んだ木材と一っしょにブーヴロン河を流してくれと頼んだ。彼等はさんざん怒鳴った。



ブルニヨンの野郎！ 厚かましい奴だ！

彼等は散々怒鳴ったが、手伝ってくれた。結局心ではわしを好んでいるんだ。」

クラムシーという街はブロン川とヨンヌ川とが合流する地点に作られたところだと先に

ご紹介しました。この合流地点に、聖マルタン教会（写真前頁）を中心として作られた城郭都市を旧クラムシー、それと



はヨンヌ川を挟んで対岸にある地区をベトレーム（宮本訳本では「ベツレエム」）街（写真左）と呼んでいます。コラじいさんは旧クラムシーの城壁の外に居住しています。

壁に閉ざされた、視界を奪われた生活なんかまっぴらだ、というわけです。ベトレーム街（「バイヤン」）に住む人は法によって定住させられた筏師家族で、ユダヤ人です。旧クラムシー（「ブーヴロン河の息子」）とベトレーム（「ベツレエムの息子」）とは、今日もなお、宗教的な微妙な問題を抱えているようですが、ロマン・ロランはコラじいさんを通してこのことを描いています。対立を見せながら、結局はそうした



問題を捨てはせず、抱擁していく陽気さ、ブルゴーニュ気質を描いているのです。左の図版はちょうどコラじいさんの頃のもの。ヨンヌ川を挟んで左がクラムシー、右がベトレーム街が描かれています。真ん中にベトレーム橋がかかっています。

クラムシーの守護聖人は聖マルタン。この聖人もフランスでは大の人気者のようです。聖マルタン教会に祀られているすべての聖人が総動員される日が来ました。9月の葡萄の収穫祭です。コラじいさんは胸を高鳴らせて、「その日」を待っていました。

「真先に、当然聖ニコラが進んだ。鎧虫の様に背中に金色の太陽の刺繍を流した法衣を着たカラーブルの王は両端が舟形に曲がった川の聖者の棒をま黒い節くれだった腕に持っていた。その棒には、桶の中に座った三人の子供を聖ニコ



ラが笏杖で祝福している図を表していた。」

水の職能集団の守護聖人・聖ニコラがあらゆる職能集団の先頭に立つのです。それに続くのは聖エロアを守護聖人とする鈴鍋・鉄鋼職能集団、聖ヴェンサンは葡萄酒、樽、聖オノレはパン、などなど。年に一度の重大な守護聖人を担いでのクラムシー挙げての葡萄酒の大収穫祭。その中に筏師組合が位置づけられているのです。

『コラ・プリニオン』では、このお祭りを9月末としています。今日もこのお祭りが開かれていますから、セガンもきっと目にしたはずですよ。

『コラ・ブルニオン』には12月6日の聖ニコラ祭が描かれてはいるのですが、それはほんのさわりだけ、じつはこの日、コラじいさんの誕生日、気もそぞろなんでしょうね。でも相変わらず口は達者でひねくれ者です。「午頃に四人の倅たちがやってきた。いくら気が合わなとって年一度は一致しないわけにやいかない。親父の誕生日は神聖だ。蜜蜂の群れのように一家が周囲にすがりつく心棒だ。この祝いをするために結束が締まる。そうせざるを得ないわけだ。それでわしはそれを望むのだ。」

四人の息子はそれぞれが生き方が違う、宗教も違う、職能も違う、その違いを互いに披瀝しケンカにいたる。コラじいさんは「彼らの中に隠れた自分に気がつく」。「めいめいの中には二十人もの違った人間が宿っているのだ。笑う奴、泣く奴、木の株のようにじっとして無関心な奴で雨が降ろうが日和がよかろうがお構いなしの奴、狼、犬、牝山羊、お人善し、暴れ者などがあるんだが、二十人の中の一人が一番強くって、自分一人で口を利いてあとの十九人には口を塞がせているのだ。」

コラじいさんのつぶやきはまるで現代を生きるぼくたちのそのようですね。セガンもそうやって、いろんな自分と同時に会いながら、その中の一人を選んで生きていったのでしょうか。

ところで、クラムシーの筏師を語るにあたっては、1949年という年を無視することはできません。それは新材で作る筏



が發明されて400年を祝う年なのですが、もう一つ大きな変化が生まれました。それは、筏の發明者はジャン・ルーヴである、だから彼を顕彰するということでベトレーム橋（ジャン・ルーヴ橋と当時改名）の欄干に彼の胸像が1828年に設置されたのですが、そうではなくて筏の發明者はシャルル・ルコントであり、その最初のパリへの運行が1547年4月のことだと史実訂正



の動向が強くなったのが1840年頃、先に紹介したクロード・ティリエらが中心になります。それが決定的に検証の末支持されるようになったのはそれから100年後。ジャン・ルーヴ胸像を撤去し代えて筏師立像を据えたのです。それが1949年というわけです。

セガンは故郷クラムシーで、始祖論争が沸き起こっているのを知っていたでしょう、その結末は見届けていません。そ

ういえば、彼の小品「筏師」の結末は、筏が座州してしまっただけで閉じられているのです。

「時には水は数プスの深さしかないところもある。すると、水がない我が親方は3、8あるいは9日間、砂で動けなくなる。つまり、座州してしまうのである。」

一体何を象徴しているのでしょうかね、座州に。